

医者も知らない 平穏死



連載②

Kさん(72)は、肺気腫と誤嚥性肺炎で入院を繰り返してました。

肺気腫は、肺の病気の終末期。呼吸が徐々にしにくくなります。今回の入院は1カ月以上と長く、認知症も併発し、かなり衰弱されてました。

そんなKさんが小康状態を得た時、「死んでもいいから家に帰りたい」と息子さんに訴えました。入院中は「口から食べると誤嚥性

舌の上にご飯が1粒

肺炎を起こす危険が高い」と、高カロリー輸液で栄養管理されていたのですが、グルメなKさんにとって、食べられないことがつらく、残念なことだったのです。

担当医は「絶対に勧められません」。しかし息子さんは父の意思を尊重し、半ば強引に退院させました。そしてその足で私のクリニックを訪れ、在宅主治医を依頼してきたのです。

〈長尾和宏〉長尾クリニック院長。日本尊厳死協会副理事長。著書に『平穏死』10の条件」など。

私は「食べても大丈夫かどうか、体を診させてもらってから」と考え、お宅を



(写真はイメージ)

てん。やっばり、たこ焼きはうまいなあ〜」
そう話すKさんは満面の笑み。隣で息子さんが、「おじいちゃん、止めても聞かへんのですわ」と苦笑してきます。
「おじいちゃん、止めても聞かへんのですわ」と苦笑してきます。
「おじいちゃん、止めても聞かへんのですわ」と苦笑してきます。

訪問。すると、すでに食べはるやん♪
「好きなたこ焼きとお寿司とご飯とおかずをな、食べます」という連絡が。
退院4日後に私が訪問した時も、旺盛な食欲を見せてくれ、「好きなもんを好きなだけ食べられて、ワシ、もういつ死んでもエエ」と。その1時間後、スーッと息を引き取られました。
しかし翌日、「父は食べながら死にました。炎で38度の発熱。自宅にいたのは4日間。訪問看護でしたが、本人は満足な最期だったと思います」と息子のKさん。Kさんの大きく開いた口の中を見ると、舌の上にご飯が1粒。本当に自然な旅立ちでした。
(火曜掲載)